

「虫めづる姫君」との出会い — 本との出会いに運命はあるか —

菊池 杏子

「人と人との出会いに運命的なものがあるように、私は人と本の間にも運命みたいなものが存在すると思う。その人とその本が出会うべき最良の時がきっとある。だから、誰かにとっての運命の出会いを見逃さないように手助けできたらと思うし、その場所やきっかけを与える場所として、図書館があったらいいなと思うの。」

これは、私が高校生の時に図書館の司書さんからかけてもらった沢山の言葉の中で、最も印象に残っている言葉である。人にとっての図書館という場所が、どんな存在であるのかを私は知らない。しかし、たしかにあの図書館は、私にとって沢山の素敵な出会いを運んでくれた場所だったように思う。本との出会いはもちろんのこと、様々な人との出会い、あの時には想像もできなかった古典文学に心惹かれる「いまの自分」があること、きっといま私の周りにある全ての物事のはじまりはあの空間にあったと言っても過言ではないように思う。そう思えるほどに、あの時の私にとってのあの場所は他のものには代え難い大切な場所だった。勉強に追われ、なんだか周りに流されて、必死に過ごしていた 毎日の中で、あそこで過ごす時間があの時の私にとって一番の安らぎだったことは、いまでも疑う余地のないことなのだから。そしてきっと、目まぐるしい毎日を送っていたあの頃に図書館を大事な場所だと思っていたのは、私だけではなかったと思う。

「本との運命の出会い」これを信じてみたい、ただそれだけの理由から、大学では日本文学に真剣に向き合い、必死に取り組んでみようと思った。四年間をかけて、一冊も運命の本に出会えないのならば、それはそれで私と文学作品の間に運命的などともともない、文学を学ぶのは向いていなかったのだということを自覚でき、私自身がこれまで国語を学んできた中で感じた様々な葛藤についても納得できる気がしたのである。

教育大学に進学して何かを専門的に学ぶのなら、将来のために自分の抱える苦手意識を払拭しておき

たかったし、自分の尊敬する人たちが好きだと思ふものを絶対に好きになりたかった。でも、日本文学を学びたい動機がそれだとは、どこか学ぶ者としては不純な気がしてしまい、どうしても言えなかった。そのため、志望動機を書く紙には、本音をひた隠しにし、適当でいかにもそれらしい理由を作り上げて書いたことをいまでもよく覚えている。いま思いかえしてみれば、あの紙には特別な意味が込められていたわけではなかったようだから、そこまで警戒する必要もなかったのだと思えるのだが、あの時はそういうことまで細かく気にするほど、とにかくいろんなことを自分なりに何とかしてみたくて 必死だったのだと思う。

しかし、そんな必死な思いで手に入れた学ぶ場所にあっても、もともとの苦手意識を払拭していくことはそう簡単なことではなかった。その当時に私が文学作品に対して抱いていた印象といえば、古典文学に関しては絶対に読み違いをできないという妙な圧迫感であり、逐語訳の楽しさは見出せない、楽しみ読みはそれなりに好きで食欲に取り組みても、調べ読みで本を読み進めることは、かなりの苦痛であり、困難なことだった。

「本との運命の出会い」を信じたい、そんな私の望みを打ち砕くかのように、とても運命とは思えないような本との出会いが続き、読む楽しみよりも読む苦しみが増していくばかりで、正直言って学ぶ楽しさを見出せない時期は長かった。

どうしてここに来たかったのか、何故自分は頑張りきれないのか、もともと私には無理だったのだろうか、そういった答えのない自問自答を繰り返すばかりで、人よりも多くの時間をかけて努力をすることでしか人並みなことができない自分が本当に悔しく、情けなかった。自分で選んだ場所のはずなのに、逃げたいと思うことの方が多かったかもしれない。

さまざまなことを後悔し、前向きになれなかった中で、私は一つの物語と出会った。それが、『堤中納言物語』の中の一編である「虫めづる姫君」である。

「虫めづる姫君」とは、あらすじを以下に示すと、

蝶の好きな姫君の隣の邸に安察大納言の邸があり、この邸の姫君は、物の本体こそ心ばえがあるものと思ひ、蝶の本体である珍しいさまざまな毛虫ばかりを集め、年ごろになっても化粧さえせずにいた。両親も侍女たちも困惑するのだが、陰口も何のその、姫君は男童を使って虫を採集するのであった。とうとう世間の評判になって、右馬佐という上達部の息子は帯の端を蛇の形に似せて動くような仕掛けをして、鱗模様の懸袋に入れて文を送るといういたづらを試みる。姫君は恐ろしいのをこらえながら、贈り物についていた歌を詠み、無風流な厚紙に片仮名で返歌をする。物好きな右馬佐は風変わりな、この様子に面白いと思ひ、友人の中將とともに卑しい女の姿に変装して立部の陰から垣間見をする。姫君は評判通りで、あきれはてて、姫君の姿を見たという歌を贈って、笑いながら二人は帰った。

（『鑑賞 日本古典文学 第十二巻 堤中納言物語 とりかへばや物語』より）

という物語である。あらすじだけでは、面白さを伝えることが難しいのだけれども、古典文学の中で、一瞬にして私の心を奪っていった物語は大学で日本文学について四年間学んだいまとなっても、これ以外には思い当たらない。それまでの私にとっては、古典文学との間には、「正確な逐語訳をすること」というとてつもなく大きな壁があり、ある程度読めないと面白さも何も感じられないものでしかなかった。そのため、いつも取り組むことに抵抗感があり、上手く読み解けない自分に悔しさを感じながら、その難解さに苦しみつつ努力を重ねてもどうしようもなく、読み解きは苦しみだと感じていたというのが本音である。

ところが、それまでに講義で扱った物語などと違い、『堤中納言物語』は「短編集」であるということ以外は全く知らないものだったためか、「虫めづる姫君」との出会いは「なんだか奇怪で面白そうだな」と思えた。知りたい、読みたい、もっともっとわかりたい、わかるようになりたいと思ったのは、本当に久しぶりのことでそれがとても嬉しかった。まだ自分が幼い頃に、とにかく読みたくて本を読んでいた頃感じていた、「読むことの楽しさ」をこの物語が私に思い起こさせてくれたのである。

この物語との出会いが遅かったために、この運命の出会いを学士論文などの自己の勉強へとつなげられなかったことは、それまでの自分自身の努力の不足によるものだと感じている。しかし、個人的な楽しみとして心から楽しんで読むことができたからこそ、私の考えを百八十度変えてくれた物語となり、この出会いを運命的なものとして感じているのだと思う。きっと、この物語に出会えたタイミングは私にとって最良な時だったのだろう。

「虫めづる姫君」の姫君は、良く言えばとても個性的で、悪く言えば変な人である。蝶ではなく毛虫を好み、眉のお手入れもしなければ、お歯黒もしない。当時の常識から考えると、彼女の存在はどこまでも非常識であり、周囲からすると受け入れがたい存在であろう。でも、ただの変人なのかというと、決してそうではないところに、彼女の魅力がある。

私はきっと、彼女の魅力に魅せられてしまったのだと思う。「恋は盲目」とはよく聞く言葉で、別にこれは恋ではないが、とある人の中に自分にとってとても好ましい部分を見つけてしまったとき、その人の欠点というものは誰も見失うものではないだろうか。私は、彼女の言葉に好ましさを感じ、人としての魅力を感じた。毛虫を好むことにも、化粧を嫌うことにも、彼女らしいもっともな理由があり、彼女はそれを譲りたくないだけなのだと思ったとき、何だかとても愛しく感じてしまったのである。たしかに、毛虫を好むことや化粧をしないことは、彼女の女性としての魅力を損なうことかもしれない。しかし、それが彼女の人としての魅力を損ねているとは私には思えなかったのである。

姫君の言葉の中でも、特に好ましく感じたのは、

「人々の、花、蝶やと愛づるこそ、はかなくあやしけれ。人は、まことあり、本地尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ」

「ひとはすべて、つくろふ所あるはわろし」

（『鑑賞 日本古典文学 第十二巻 堤中納言物語 とりかへばや物語』より）

という部分である。

はじめてこの物語を読んでみたとき、「表面的なものを好み、その物事の本質を知ろうとしないなら、それを好きだとは言うな」「なぜ（化粧などして、わざわざ）装わなければならないのか」と、なんと

く空気を読んで周囲との歩調を合わせようとしている私自身に言われた気がしたのである。そこはあくまでも私の個人的で勝手な楽しみ読みにすぎなかったのだが、これをきっかけとして、どうしようもなく彼女に心惹かれてしまった。

この物語における彼女の行動や描かれ方は、当時の人々にとってはへりくつで滑稽なものであったかもしれない。だが、小さなことで思い悩み、立ち止まっては戸惑っている私にとっては、彼女の生き方はどこまでも清々しく真っ直ぐに感じられた。

例え、自分の考えに賛同するものが一人もいなくとも、その道を突き進んでいる彼女を羨ましく感じるとともに、私も感情の赴くまま、真っ直ぐに生きたいと思った。現代において自分の望むままに生きることよりも、平安時代に彼女のような生き方をすることの方がきっと難しかったはずである。だからこそ「ありえない話」として当時の人々に愛された物語となったのだと思うが、現代に生きる私には当時とは違う読みがあってしかるべきではないだろうか。

物語を読むこと、そこで楽しむことは、なにも正しい逐語訳を追い求めることではない。逐語訳を進めて物語を読み解く中で、いかにそこで駆使されている文章表現を訳として反映できるか、そこが現代語訳の楽しさというものなのではないだろうか。この物語と姫君は私にそれを気づかせてくれた。古典文学の読み方を教えてくれた。もっともっと楽しい読みがあることを示してくれたのである。だから、私はこの物語との運命の出会いを信じたい。この大学で過ごした四年間の中で、この物語と出会うことができて本当によかった。

私がこの物語と出会ったのは、ただの偶然だったのかもしれない。私にとっては困難な調べ読みを進めている中で、何となく手に取った一冊の中に『堤中納言物語』のあらすじが載っていて、そこから面白半分て手に取ってみる気になったのだから。この物語との出会いを運命だと信じたい今、私が思うことは、本との出会いを運命にできるかどうかは、私

の心次第だということである。

本との出会いを運命に、自分にとってよいものができるかどうかはその人の心次第であるならば、図書館という場所は以前に司書さんが言っていたように、誰かにとっての運命の出会いをサポートする存在となるのではないだろうか。私は、きっと人よりもほんの少しだけ早い段階で図書館や本の魅力に魅せられた経験があったというだけなのだろう。

これから、一人の大人として社会に出る中で、受けとる側ではなく誰かに授ける側に立つ存在として、多くの人たちにとっての運命の出会いを手助けできる一人になりたいと思う。そう思うきっかけとなった図書館と、「虫めづる姫君」との出会いに感謝している。これを運命とできるかどうかは、きっとこれからの自分の取り組みと頑張り次第なのであろう。しかし、それができない気はしない。今の自分にとって最も必要なことは、姫君の生き方を適度に見習って、自分の信じた道を切り開いていくことなのではないかと思えるから。

図書館という場所が、私と「虫めづる姫君」との出会いを与えてくれたように、まだ運命の出会いをしていない多くの人たちにとっても、素敵な出会いを与えてくれる場所となることを願いたい。

- ・『堤中納言物語 とりかへばや物語 新日本古典文学大系 26』, 今井源衛 他 校注, 岩波書店, 1992
- ・『鑑賞 日本古典文学 第十二巻 堤中納言物語 とりかへばや物語』, 今井源衛 他 編, 角川書店, 1976
- ・『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 とりかへばや物語』 鈴木裕子編, 角川書店, 2009
- ・『落窪物語 堤中納言物語 新編日本古典文学全集』 校注・訳 三谷栄一 他, 小学館, 2000

(きくちきょうこ・釧路校4年)